

たり、徹底した小項目主義によつて、およそ三三〇〇項目を収めている。執筆者は京大だけでなく、全国的に近代史研究者を結集しており、各項目はいずれも年代と事実を明確にし、陰陽暦の対称関係などに厳密にされている（たとえば外交関係項目をみよ）。日本近代史の研究が近時とみに盛んになりながら、その学問としての歴史の若さから、なお多くの点において見解の相違を存在せしめている現状のもとで、このような事実それ自体の確定を主要な目的とした辞典の刊行は、まさに機をえたものである。項目ごとに参考文献を掲げ、執筆者名を記して責任の所在を明らかにしていることも、右の見地からみて適切な処置であると思われる。

さらに、この辞典の大きな特徴として、全体の三分の一の頁数を占める付録・統計・索引をあげねばなるまい。付録には、府藩県对照表・初期官制沿革表をはじめ、明治初期主要官職補任・元老・歴代内閣・植民地長官・主要対外外交官・同駐日外交官・特殊銀行・会社最高幹部・陸海軍主要官職補任・占領軍行政機構および主要ポスト補任等々全部で三七一の覧表がある。明治主要新聞雑誌・左翼

運動機関紙誌一覧・右翼団体系統図などは珍しいものである。統計は、人口・農・林・漁・鉱・工業・運輸・貿易・通貨および金融・会社・物価・労働・財政・教育・衛生の各項について基礎的なデータをあげている。最後に、本文・付録を通じて出てくる約一五〇〇〇の件名・書名・人名の索引を作つているので、本文の記載と合せて一種の索引年表的な役割をも果している。総じてこれらの点は、近代史における読史備要のような機能を果すものとして個人的な使用に甚だ便利であり、編集者の苦心の察せられるところである。ただ、これだけのものとしては、索引の見出し（五十音順）がみにくいのが残念である。（A5判九九〇頁 東洋経済新報社発行 定価二、三〇〇円）（朝尾直弘）

### 京都大学西洋史研究室編 西洋史辞典

京都大学西洋史研究室関係者約百三〇名が五年の歳月を重ねて刊行したものである。本来この辞典が計画されたのは、「読む」辞典をたてまえた大型の辞典とは別に、利用

度の高い小項目主義の「引く辞典」の果す役割が、案外なおざりにされていたのではなからうかという反省から出発したのであつた。五千からなる各項目は、単に歴史事実の羅列ではなしに、歴史評価、アップ・ドゥ・デートの見解や問題におよんでいて、歴史研究家以外の使用にも充分配慮が加えられているようである。項目の選定にはとくに苦心のあとがうかがえる。

また九人のすぐれた編輯委員の緊密な協同作業が、この種の辞典におこりがちな各項目の間に生じやすい不統一を最少限にいとめているのは見事である。また各項目に付せられた原名の出し方についても苦心のあとがうかがわれ、印刷も「引く辞典」として満足出来るものであろう。

また付録として、人名・地名対称表、首長表、系図、科学史年表、行政区劃圖、地図などがつくられている。（各時代、各地方の貨幣の種類とその換算表が缺けているのは惜まれる。）とくに総索引には非常な配慮がはらわれており、本書の利用価値を倍加しているといつても過言ではない。（A5版約一〇〇〇頁 東京創元社発行 二、三〇〇円）（永井三明）